

報告書抄録							
ふりがな	ありた・こたべ 53						
書名	有田・小田部 53						
副書名	有田遺跡第245次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1214						
編著者名	杉山富雄						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号 TEL092-711-4667						
発行年月日	2014年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>
ありた 有田遺跡 (第245次)	ふくおかしふくやま 福岡県福岡市 きわらくこたべじょくめ 早良区小田部五丁目	40130	309	33° 34' 12"	130° 19' 56"	20120618 ~ 20120717	185 記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
有田遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居 1, 構 1	土師器, 頸椎器			
要約	調査地は、有田遺跡の立地する段丘末端部にあたる。両側が深く入り込む谷となる地形の先端部に位置して、前面に沖積低地がある低い台地縁辺部に立地する。縁辺部に沿う溝、台地平坦面で竪穴住居を調査した。長方形の平面、長辺側に竈をもつ竪穴住居であり、調査区内では1棟のみの検出である。隣接調査区では竪穴住居は確認されておらず、広い平坦部に独立して建っているような景観を考える。有田・小田部台地末端部における該前の土地利用状況を示すものと考えられる。						

有田・小田部 53

— 有田遺跡群第245次調査報告 —

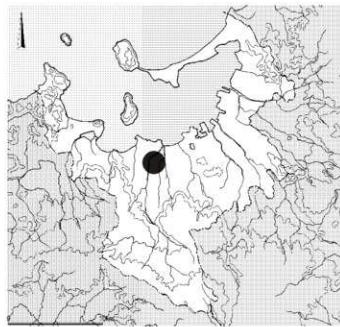
福岡市埋蔵文化財調査報告書第二二二四集

二〇一四

福岡市教育委員会

## 有田・小田部 53

— 有田遺跡群第245次調査報告 —



調査番号 1209  
遺跡略号 ART-245

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1214集							
<b>有田・小田部53</b>							
— 有田遺跡群第245次調査報告 —							
2014年3月24日							
発行	福岡市教育委員会	福岡市中央区天神1丁目8番1号					
印刷	株式会社西日本新聞印刷						

2014

福岡市教育委員会

## 序

福岡市の西部に位置する早良平野は、歴史的にみても重要な位置にある地域です。

福岡市では、工事等により現状での保存が不可能となった埋蔵文化財について、記録による保存を図ることとし、そのための発掘調査を行ってきました。本書は、この目的で早良区小田部五丁目地内において実施した有田遺跡群第245次調査の報告書として刊行するものです。

本報告の刊行は、関係各位の埋蔵文化財についての深い御理解と多大な御協力の結果であるとをここに記し、心からお礼を申し上げます。また、本書が早良平野の歴史について理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井龍彦

### はじめに

- 1 書は、2012(平成24)年度、福岡市早良区小田部五丁目地内において福岡市教育委員会がおこなった、有田遺跡群第245次調査の報告である。
- 2 発掘調査は、福岡市教育委員会が文化財保護法第93条に基づく届け出を受け、埋蔵文化財保存についての協議を行った結果、事業者の依頼により、記録保存を目的として、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課が実施したものである。作業は、関係各位のご理解とご協力のもと、円滑に遂行することができた。この場で深く感謝申し上げる。
- 3 発掘調査及び報告は、埋蔵文化財課 杉山富雄が担当した。
- 4 出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

### 凡例

- 1 位置の記録は、国土座標(世界測地系)に依った。
- 2 図中に用いる方位は国土座標の座標北である。
- 3 報告中の遺構・遺物番号は、それぞれ登録番号を用い、調査現場での記録から整理、収蔵まで一貫して管理し、台帳・実測図・日誌等調査記録に記載した情報と極力関連づけておくことに努めた。記述中必要に応じて、遺物には「R」、遺構には「M」を付した。

遺跡調査番号	1 2 0 9			調査略号	A R T - 245
調査地籍	福岡市早良区小田部五丁目 20, 21番地			分布地図番号	8 1
工事面積	396 m <sup>2</sup>	調査対象面積	198 m <sup>2</sup>	調査面積	185 m <sup>2</sup>
調査期間	2012(平成24)年6月18日～2012(平成24)年7月17日				

## 本文目次

1 有田遺跡群第245次調査の概要	1
(1) 発掘調査の経緯	1
埋蔵文化財事前審査 発掘調査の実施 発掘調査の経過	
(2) 遺跡の位置と環境	1
(3) 既往の調査	1
2 有田遺跡群第245次調査出土の遺構と遺物	
(1) 有田245次地点の土層	5
(2) 調査出土遺構と遺物の概要	5
(3) 有田245次調査地点出土の遺構と遺物	6
豊穴住居1 (図7~15)	6
豊穴住居1・竈2 出土遺物 (図16~18・24)	6
溝22 (図19~22)	13
溝22 出土遺物 (図23・24)	13
段落ち21 (図19~22)	16
段落ち21 出土遺物 (図24)	14
土壤13 (図5)	16
不整な落ち込み16 (図5)	16
その他の遺構出土遺物 (図24)	17
3まとめ	18

## 図目次

図 1 有田遺跡群第245次地点位置図 (1:50,000)	1
図 2 有田遺跡群調査区位置図 (1:2,000)	2
図 3 有田245次調査1区(東から)	3
図 4 有田245次調査区(東から)	3
図 5 有田遺跡群第245次調査区全体図 (1:100)	4
図 6 有田245次調査区土層 (1:100、西から)	5
図 7 竈2 (1:30)	6
図 8 豊穴住居1 (1:40)	7
図 9 豊穴住居1 (1区、南から)	8
図 10 豊穴住居1 (2区、北から)	8
図 11 豊穴住居1 土層 (西から)	9
図 12 豊穴住居1 土層 (南から)	9
図 13 竈2 遺存状況 (東から)	9
図 14 竈2 燃焼部 (東から)	9
図 15 竈2 断面 (東から)	10
図 16 豊穴住居1 出土遺物実測図 (1:4)	11
図 17 豊穴住居1 出土遺物 1	12
図 18 豊穴住居1 出土遺物 2	13
図 19 溝22 土層断面 (1:40)	13
図 20 溝22 (1:40)	14
図 21 段落ち21・溝22 (東から)	15
図 22 段落ち21・溝22 (西から)	15
図 23 溝22 出土遺物 (1:4、1:3)	16
図 24 遺構出土遺物 実測図 (1:1・1:2・1:4)	17
図 25 有田245次調査地点位置図 (1:5,000)	18

## 1 有田遺跡群第245次調査の概要

### (1) 発掘調査の経緯

**埋蔵文化財事前審査** 平成24年4月27日付で福岡市教育委員会にて、福岡市早良区小田部五丁目20番ほか地内における分譲住宅建築に伴い、埋蔵文化財の有無について照会があった。隣接地で発掘調査を施行済みであったことから、文化財部埋蔵文化財審査課では、当該地にも埋蔵文化財が遺存するものと判断し、事業者と設計変更等による現状での保存について協議を行った。

しかし、計画建物基礎が埋蔵文化財への影響を避けることができない構造のものであることが判明したことから、事業者の協力を得て、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

**発掘調査の実施** 本発掘調査は、事業者の委託を受け、有田遺跡群第245次調査として、文化財部埋蔵文化財調査課が担当した。

**発掘調査の経過** 発掘調査は2012(平成24)年6月18日着手した。調査範囲は、建物の基礎工事が及ぶ区域を外周とした範囲を対象とし、廃土置き場を確保するために東西に分割して進めることとした。まず、西側2/3の区画を1区として機力により表土を鏝取り、遺構検出、振り下げを行った。

調査時期が梅雨にかかったこともあって、調査区内へ水が滲み出るため、周囲に排水口を掘削し、排水ポンプを設置して作業を行った。1区の調査を完了し、土砂を反転、残る東部分の表土を鏝取り2区を設定したのは7月3日である。2区も1区同様排水を続けながらの調査となつた。7月17日、2区の調査を終え、同日埋め戻し、機材を撤収、調査を完了した。

発掘調査面積は1・2区併せて185m<sup>2</sup>、出土遺物はコンテナ2箱ほどの分量となつた。

### (2) 遺跡の位置と環境

有田遺跡群は、早良平野中央に位置する中位段丘状に立地する。この地形をここでは有田・小田部台地と呼ぶことにする。有田・小田部台地は、南端の最高所から北の下流側に向かって裾広がりとなり、その裾部が八つ手状に深く開析された地形となつてゐる。現状は、昭和40年代に施工された区画整理により起伏の少ない宅地となつてゐる。旧地形は南端付近の最高所で標高14m、北辺では標高4mを測り、北へ勾配をもつた広い平坦面や、南北方向の緩い尾根両側の緩斜面が複雑な形状で分布し、谷部とは崖線を以て画されているような景観があつたことが、地形図・空中写真から分かる。

第245次調査地点は、遺跡の北端部に位置し、有田・小田部台地の北辺部に立地する。現況地盤で標高5m、調査面で4mほどの高度があり、調査区以北が沖積低地となつてゐるようである。

### (3) 既往の調査

調査地の南に隣接して第22次調査地点が位置する。ここでは、溝の他に建物12棟が復原されている。遺物は極少量出土し、弥生土器、古墳時代の土師器、輪羽口等が含まれている。なお、掘立柱建物については、報告者は柱穴や建物の規模の点から再考の余地を示している。近隣調査地点としては、南に80m離れた位置に152次ほか地点があり、弥生時代前期・古墳時代中期～後期の集落を調査している。谷を隔てた東には第33次地点があり、古墳時代後期の集落を調査している。



図1 有田遺跡群第245次地点位置図 (1:50,000)

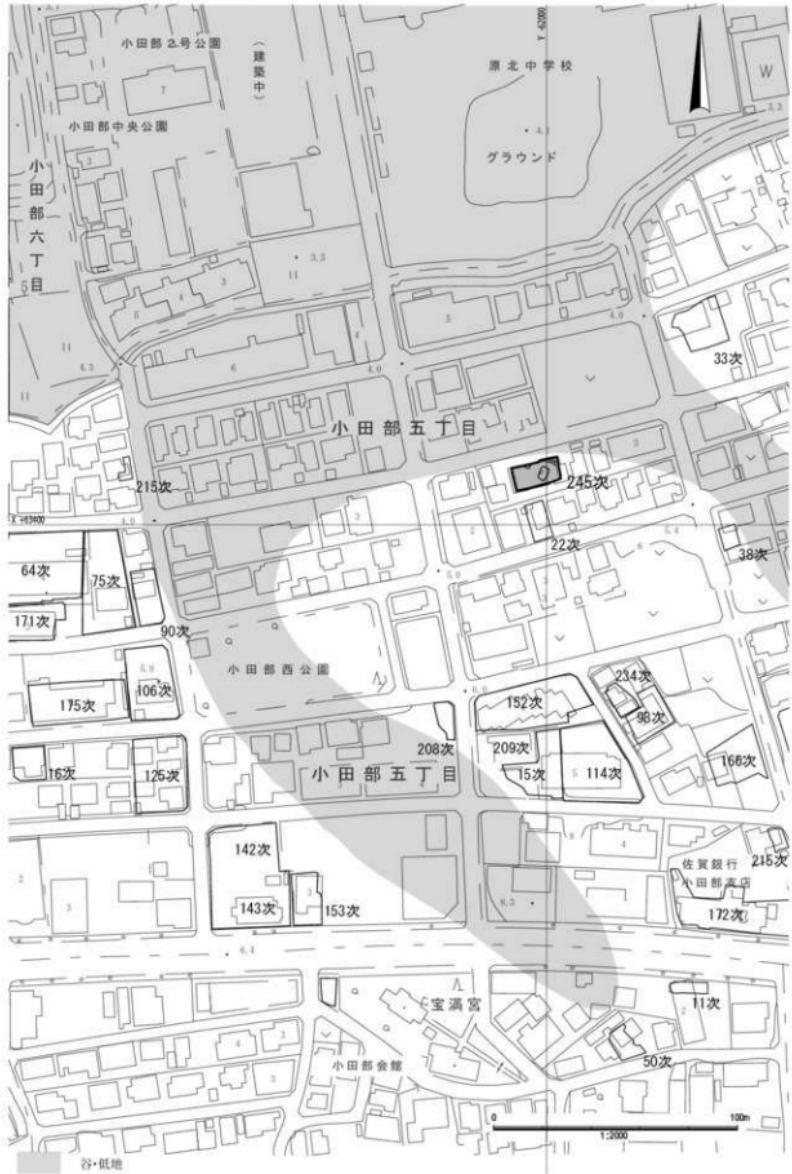


図2 有田道路群調査区位図(1:2,000)



図3 有H245次調査I区（東から）

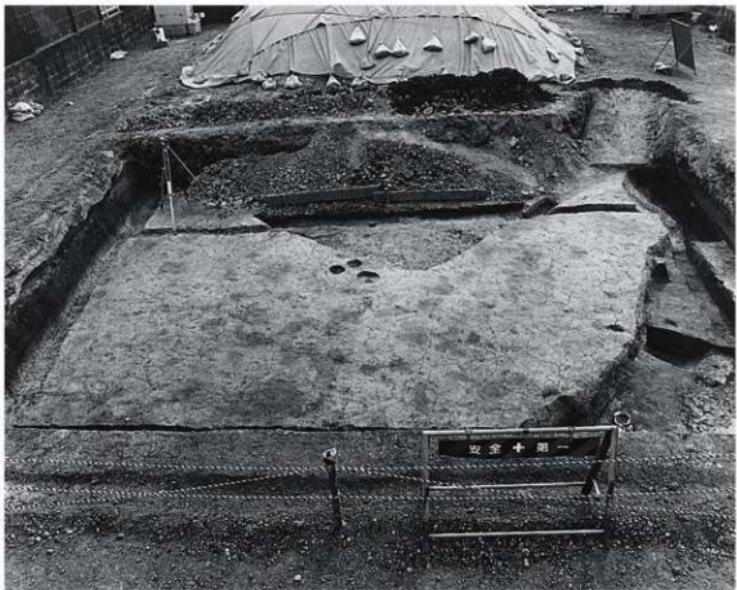


図4 有H245次調査区（東から）

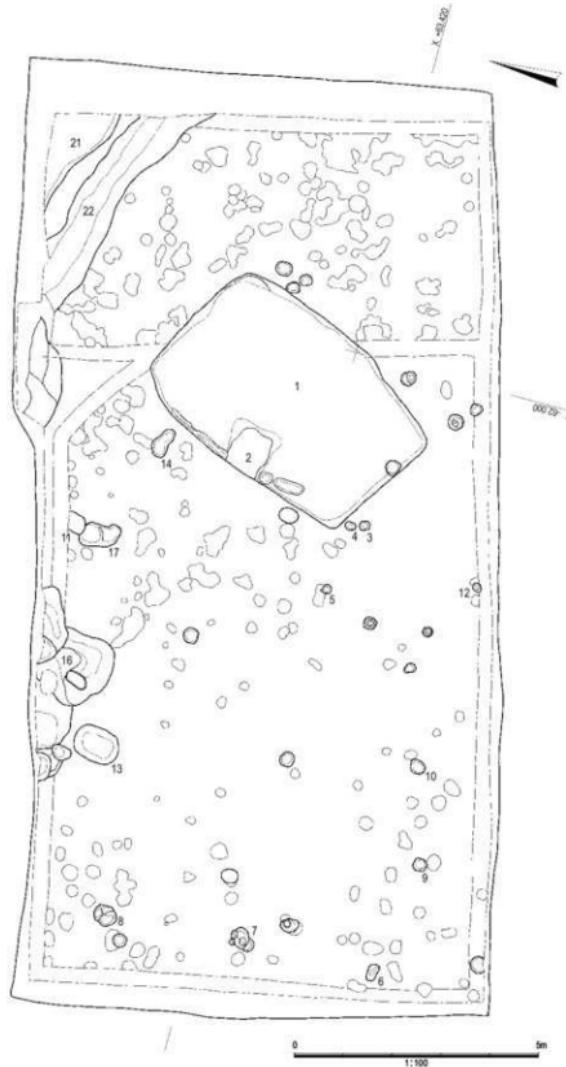


図5 有田遺跡群第245次調査区全体図(1:100)

## 2 有田遺跡群第245次調査出土の遺構と遺物

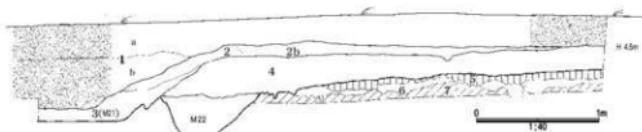
### (1) 有田245次地点の土層

調査区東壁土層を図6に示す。地山面とする粘土層(7層)は、北に向かい緩く傾斜し、現況地盤からの深さ1.2~1.5m、標高4.0~3.6mの位置にある。この面を遺構検出面とした。なお、この粘土層は標高3m以下の位置では灰白色となり、緑色味のある風化礫様のものを含んで八女粘土の特徴を示すようになる。地山面を覆う層は大きく3部分に分けることができる。

上位層は調査区北辺部の段落ちを埋めて現況地盤を形成する。地表面付近を除いて現況景観を形成した区画整理による造成部と考えられる。中位の層は、断面に現れた段落ち(M21)を形成した部分(4層)と段落ち部を含めた全面を覆う層(2・2a・3層)とに区分できる。下位層は地山面を覆う層(5・6層)である。2・3層が区画整理前の表土層とみられ、ほぼ水平である。断面部では2a部が粗砂をより多く含むことからこの部分があるいは水田耕作土で、肩部が畦ではないかと思われた。段下を覆う3層は水田耕作土のように見える。この段差を形成する基盤の4層は少量の木炭、土器細片を含んで全体に有機物で汚れた感じを受け、台地部の耕作や耕地の改変の過程で生成されたもののように見える。下位層の上部はクロボク様のシルト質粘土(5層)、下部は5層との境界は黄褐色の粘土質シルト(6層)で、いずれも調査区南側に偏って分布しました。地山7層の凹凸も相俟って厚さの変異が顕著である。5・6層は、地山層の落ち込みを埋めている。これが調査面では不整な落ち込みとなって現れ、それが漏斗状の断面形となっているためか、調査時、削り込むことにより小穴と見えるようになる。壁面の観察では、下位層で遺物を確認することはできなかった。

### (2) 調査出土遺構と遺物の概要

分割調査した1・2区併せて185m<sup>2</sup>の調査範囲において、遺構として記録したものは少数である。堅穴住居とするもの1棟(M1)及びその構成遺構として竈(M2)、その外は溝1条(M22)、土壤とするもの1基(M13)、段落ち1箇所(M21)、小穴のいくつである。このほかに不整な落ち込みとするものの



1 硬土造成、段落ち部を真砂で埋め、旧耕作土上は、地山ローム(褐色粘土)、真砂、ロームと重ねる。現地表は砂利で整備。現況地形を削除するもので、区画整理時の造成。

2(3) 分散シルト・暗褐色(10YR 4/3)水田と疊(畠状)を成す。2a部が水田耕作土か、粗砂をより多く含む。段下(北下方)では、砂混じり粘土・暗褐色(10YR 4/1)となる。(3)(M21)とする部位。

4 シルト質粘土・暗褐色(7.5YR 3/3)旧状地形の基盤部、まれに土器細片、木炭を含んでいることから、耕作地改変の過程で生じたもののか(耕土の移動)。調査区全域に分布。

5 シルト質粘土・極暗褐色(7.5YR 2/3)断面では、斑状に分布する。黒色味あり。旧表土(クロボク様)。

6 粘土質シルトにぶき・黄褐色(10YR 4/3)旧表土下層に相当するものか。調査面の落ち込み覆土に一致する。下面是木の根状を呈す。

7 粘土・純い黄褐色(10YR 6/3)地山。細縞混じり。M21下底部では八女粘土が現れる。

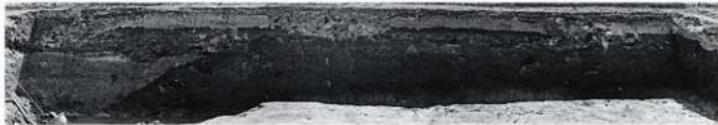


図6 有田245次調査区土層(1:100、西から)

いくつからからは遺物が出土しており、採番記録した

調査面では、小穴、不整な落ち込みが数多く分布する。1区の調査ではそのすべてを掘り上げた。しかし、これらの殆どは輪郭が不明瞭で底が先細りする、あるいは分岐する等の形状のものが多く、樹根痕跡など生痕を疑われる。覆土は、東壁土層6層、7層と同性状のものである。1区では5層を覆土とするものが混じり、2区では殆どが6層を覆土とするものであった。いくつかの小穴について柱痕跡の可能性を考え、断面で観察したが、それとわかるものはなかった。遺物の出土も極少数である。これらのことから2区の調査では不整に広がる落ち込みについては調査対象から外し、明瞭な輪郭、整った形状のものについてのみ調査したが、いずれも柱穴とは確認できなかった。

遺物は、竪穴住居、溝出土資料を除くと、少量が、散漫に出土したのみであり、含まれる土器の殆どは細片化した資料である。表土層からの出土もごくわずかである。土器は土師器若しくは弥生土とみえる資料が殆どを占める。分量は個体資料を除くと、コンテナ1箱ほどの量となる。

### (3) 有田 245 次調査地点出土の遺構と遺物

以下、調査遺構および出土遺物について報告する。

#### 竪穴住居1(図7～15)

1・2区の境界部に位置したことから東西分割しての調査となった。平面形が胴脛れの闊円長方形形状を呈し、長軸は北東～南西方向にある。北西に面した長辺側の壁中央に竈(竈2)を設けている。住居の長軸長5.2m、短軸長3.6を測る。柱穴は住居内では検出できなかった。住居外の可能性も考えたが該当するような遺構を確認することはできなかった。竈は奥行き、幅とも0.8mほどの規模である。

住居の壁は床面から0.2mの高さまでが遺存する。竈は下部のみが遺存する。竈近くの壁際に壁溝が観察された。また、断面図では壁際の床面がややくぼんでいることがわかる。

床は貼床である。堀方は中央部がやや深く、竈部を掘り残している。貼床の厚さは中央部で10cm、壁近くでは5cm程である。堀方を埋めるのは大部分が地山土塊、間に黒褐色粘土質シルトが充填する(図8-4層)。これにより水平な床を構築している。

住居内は竈部を含め暗褐色粘土で埋まる、その下部には卵大～拳大的地山土塊が含まれ、半ばを占めている(2層)。上半部では地山土粒を含む(1層)。南1/3程の範囲では、この層下に黒褐色粘土質シルトが南壁側から堆積したような状態で、床面上に堆積している(3層)。

**竈2 竪穴住居1へ作り付けられた竈である。高さ15cm程で、下部のみが遺存するものと思われる。**  
竪穴住居壁をその奥壁に利用して「コ」の字形に粘土質土塊を積み上げて構築しているものとみえる。構築材は性状から地山土と思われる。横断面からみえる壁の厚さは10～15cmである。竈内出土の焼土灰にはすざ状の圧痕があり、植物を混ぜ痕で構築材としたものか。

竈の内面側が赤褐色を呈すのは被熱によるものと考えられる。

竈内覆土は、上部に地山土塊を含む有機物混じりの層(1)。下部は暗褐色粘土層で灰層のような印象を受ける(4)。下部層には焼土塊が混じり、竈内から焚口を想定される位置まで広がっている。焚口部ではその下に木炭の分布を確認した。

竈中央部には石製の支脚が据えられている。断面では下部を粘土塊で押さえているように見える。支脚石材は、被熱、部分的に亀裂を生じている。台石(若しくは敲石)の転用である。

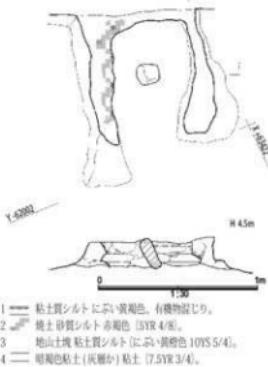
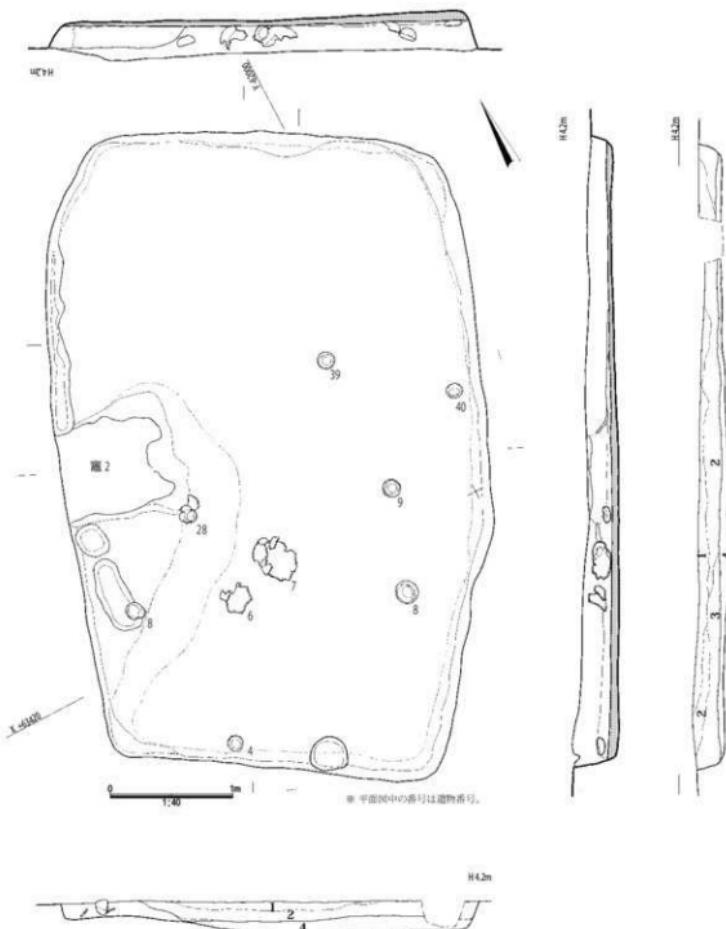


図7 竈2(1:30)



- 1 粘土(粗砂混じり) 噴褐色(10YR 3/4)でよく縮まる。地山土粒を含む。  
 2 基質の性状は1に同じ。地山土塊(崩大~掌大)が半ばを占める。  
 3 粘土質シルト(粗砂混じり) 黒褐色(10YR 2/3) 橢状。地山土塊を含む(30%)。  
 4 3と同性状だが、大部分が地山土塊(粘床)。  
 地山: 粘土質シルト(粗砂混じり) に赤い黄褐色(10YR 5/4)。

図8 型穴住居 I (1:40)

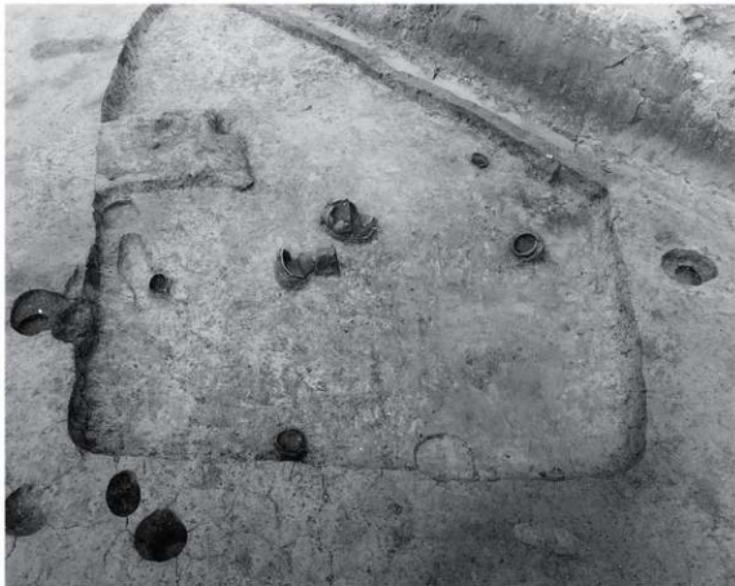


図9 穹穴住居1(1区、南から)



図10 穹穴住居1(2区、北から)



図11 壁穴住居1 土刷(西から)



図12 壁穴住居1 土刷(南から)



図13 窓2 遺存状況(東から)



図14 窓2 燃焼部(東から)



図15 竪2断面(東から)

竪穴住居1・竪2出土遺物（図16～18・24）竪穴住居1では、住居の南半部の床面、その直上から完形、大破片の土師器が出土した。碗8点と甕2点がある。碗の大部分は完存、部分欠といった遺存である。甕は部分欠、部分の大破片の状態で遺存する。これら以外では少量の土器細片が貼床部、住居覆土から出土したのみである。ただ、竪内覆土中からは、甕の体部細片が他よりまとまった数出土している。これらの大半は土師器であり、ごくわずかに弥生土器が混じる。器形を復原できるような資料は見当たらない。須恵器については住居覆土と竪内から壺蓋と思われる極細片が出土してしまった。なお、両者は接合する。

以下、形状を復原できる資料について報告する。

土師器碗(40・39・28・4・9・5・8) 口縁部径にしたがって配列図示した。9を除きいずれも丸底の器形である。

碗40は口縁部の一部を欠く資料である。上半部が口縁に向かい内向内湾し、最大径は体部中位にある。器表は荒れて詳細不明だが、外面上部に笠削り調整とみられる痕跡がある。口縁部に沿う方向に帯状の平坦面が形成されている。胎土緻密で、粗砂混じり。器表は遺存不良、橙色(2.5Y 5/6)を呈す。口縁部径9.2cm、体部径10.8cm、器高10.6cmを測る。

碗39は、口縁部の一部を欠く。外面は撫で調整後、底部から2/3の位置まで笠削り調整。口縁の接線方向に繰り返しながら周回方向に作業を行なう。内面は撫で調整。口縁部は薄く仕上られて、不整な波状を呈す。胎土は緻密だが、粗砂・細礫を含む。器表にぶい褐色(7.5YR 5/5)を呈し、一部が剥落する。口縁部径11.8cm、器高4.7cmを測る。

碗28は、口縁部の一部を欠く。器表は荒れて調整不明。口縁部僅かに内湾、端部が外反する胎土は緻密で均質、少量の粗砂・細礫を含むほかに褐色焼土様粒を含む。器表は浅黄橙色(7.5YR 8/4)。口縁部径12.5cm、器高5.6cmを測る。

碗4は、上半の一部を欠く資料である。外面は撫で調整後下半部、特に底部を主として笠削り調整を行う。笠削り調整は、短い単位で口縁接線方向に行なう。内面撫で調整、口縁部付近は周回方向となる。外面の全体から口縁部内面まで煤状の付着物が斑状に残る。胎土は粒状性をもち稀に細礫を含む。器表はにぶい赤褐色(5YR 5/4)を呈し、全体にくすんだ印象がある。口縁部径12.2cm、器高5.0cm、最大径部は体部にあり、13.2cmを測る。

碗5は、口縁の一部を欠く資料である。外面撫で調整・笠磨き調整後、更に粗い笠磨き調整を加える。内面撫で調整後、底部・体部に口縁の接線方向に粗目の笠磨き調整を加える。底部丸底。胎土は粒状性を持ち、粗砂・細礫を少量含む。器表はにぶい黄橙色(10 YR 6/4)を呈し、全体にくすんだ状

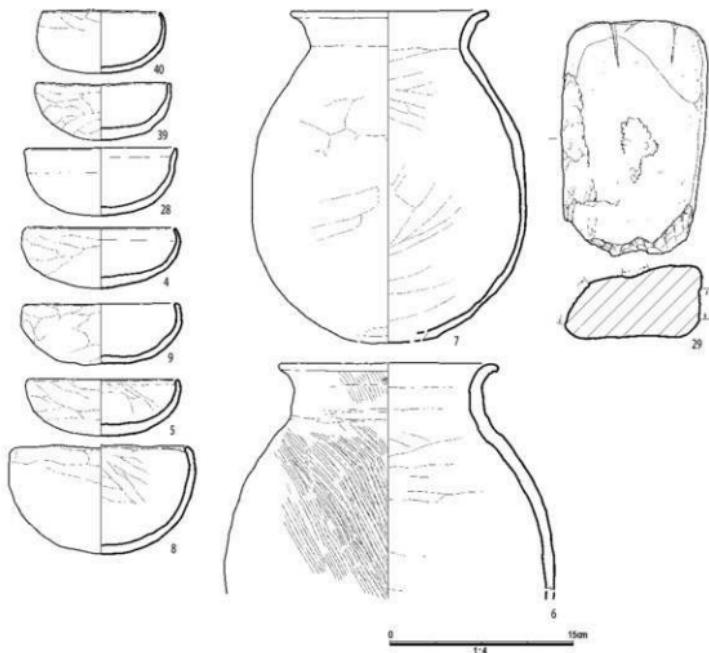


図16 穴住居1出土遺物実測図1(1:4)

態。2/3の内外面は黒褐色～黒色を呈す。胎土にしみこんだ状態となっており、焼成時に生じたものか、それ以降のものは不明、樹脂状を呈す。口縁部径 12.7cm、器高 4.4cm を測る。

碗8は、ほぼ全形を接合復原できる資料である。体部から口縁部にかけての形状は碗とする他の資料に一致するが、やや径が大で2倍以上深い。外面底部から口縁部付近まで粗い箒削り調整、底部では口縁接線方向、口縁部では周回する。胎土は粒状性あり、粗砂・細礫を含む。器表はにぶい橙色(7.5YR 6/4)を呈す。

甕7(・6) 甕7は下部の1/2を欠く資料。外面撫で調整。胴部上半に指押え痕、連続帶状の部分、亀甲状の平坦面となる部分がある。亀甲状の部分は箒削り調整、もしくは叩き調整によるもののようにもみえる。下半部には粗目の刷毛目調整後、軽い撫で調整。胴部内面に斜め上方方向の箒削り調整。口縁部内外面とも周回方向の撫で調整。底部の内外面に箒削り調整。胎土に粗砂を含み断面團粒状を呈す。器表橙色(2.5YR 6/6)。口縁部径 16.1cm、器高 27.0cm、体部径 22.3cm を測る。

甕6は、上半部1/3の破片である。外面は左斜上方の刷毛目調整。短く断続し、口縁端部まで及ぶ。全体として右方向へ移動する。その後頸部に周回方向の撫で調整。頸部と体部の境界部では明瞭に帶状を示す。口縁端部は、口縁に沿う撫で調整により外方に僅かに肥厚。胎土に砂粒～細礫を顯著に含み、断面は顯著な團塊状。器表にぶい黄橙色(5YR 6/4)。口縁部径は 17.9cm を復原し、体部径

12



40



4



39



9



8



28



5



29

圖 17 壁穴住居 I 出土遺物 I



図18 穴穴住居I出土遺物2

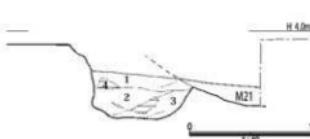
は26.9cmを復原できる。

石製支脚(29) 穴2出土。石材は直方体状の砂岩亜円礫。広い側面の中央部に打ち窪めたような痕跡、対する面には広く瘤痕状の加壓痕が残るのは、台石としての使用があったものか。一端を打ち欠いているようである。この打ち欠いた側を下に、両側を粘土で支えるようにして据えた状態で出土した。器表はやや赤化して特徴的な亀裂が走ることから明らかに被熱している。長さ19.1cm、幅11.9cm、厚さ4.8cm、重量216gを測る。

以上の他、明らかに時代を異にする石器が出土している。図24に示し、後述する。

#### 溝22(図6・19~22)

調査区北東隅に位置する。東西方向に走り、平面形は北へ膨らんで、やや弧状を呈す。断面は逆台形状、底部付近は抉れてい。上部層が下部層の平坦面を埋める(1層)。灰黄褐色粗砂で、地山下部の八女粘土起源のようにみえる。下部の層は暗褐色シルト(2層)、黒褐色シルト(3層)で埋まる。溝は段落ち21により北側肩部を失っている。また西部分の状況も段落ち21により不明瞭である。調査区内の長さ4m、幅0.9m、深さは南岸から0.6mを測る。遺物は下部層上面で土師器(45)が投棄されたような状態で出土した他に土器が散漫に、少量出土した。大半は細片資料であり、器形等不明である。



- 1 細砂 灰黄褐色 (IOYR 6/2) 地山八女粘土起源か、礫混。
- 2 砂質シルト 暗褐色 (IOYR 3/2) 地山黄褐色粘土を含む。
- 3 砂質シルト 黑褐色 (IOYR 3/2) 地山黄褐色粘土を含む。
- 4 粘土 地山土塊 (黄褐色)。

M21 砂混じり粘土 褐灰色 (IOYR 4/1)。

図19 溝22土層断面(1:40)

溝22出土遺物(図23・24) 須恵器 蓋坏身46は、全体の1/2が遺存する。体部内外面には回転を利用した整形・撫で調整痕が残る。その後、内底面に叩き目調整(内底面に同心円状の當て具痕、更に撫で調整)、外面の底部から1/3の位置まで回転を利用した箇削り調整を行う。上半部では受部整形、口縁部整形、口唇部整形、内面撫で調整・口唇部端面整形の順で行われているようである。胎土は緻密で均質、極稀に粗砂・細礫を含む。焼成堅緻で、器表灰色、体部外面は斑状に暗灰色。口縁部

径 12.2cm、器高 6.0cm を復原できる。

土師器壺 45 は、口縁部を下にして圧潰したような状態で出土した。破片は西へ向かって分布しており、あるいは流れの方向を示すものか。細片化して出土した。図示しないが底部破片資料まで含まれている。器表は荒れて剥落するが、痕跡的に調整痕が遺存する。外面左・右斜め上方の刷毛目調整を施す。前後して交差する様に残る部分がある。内面口縁部直下までの胸部に左上方・周回方向の窪削り調整。口縁部は内外面とも撫で調整、おそらく周回方向に行われたものとみえる。胎土は細砂を顯著に含む。器表浅黄褐色 (10YR 8/3) を呈す。

先述したように土器の大半は土師器資料であるが、少數、弥生土器他の細片資料が混じって出土した (58・57・56)。

縄文土器深鉢 58 底部小破片資料で、器表の磨滅著しく底部の形状から縄文時代晩期のものとした。調整の詳細不明。胎土粗砂・細礫を顯著に含み灰白色 (10YR 8/1) を呈す。底径 7.9cm を測る。

弥生土器壺 57 底部小破片、器表は顯著に磨滅して調整不明。極厚い底部で底面が顯著に撓んでいる。胎土緻密で、粗砂・細礫を顯著に含む。底径 6.3cm。弥生時代前期か。

弥生土器壺 56 底部細片で器表は著しく磨滅し、内面側は大きく剥落して原状を留めない。胎土緻密、粗砂を顯著に含み、断面團粒状。器表にぶい橙色 (7.5YR 7/4)。底径 12.4cm を復原できる。弥生時代後期か。

石錘 63 砂礫岩角礫を利用した礫石錘である。側面の各稜線、端面の各稜線を打ち欠き、潰したもので、交差する方向の紐掛けを想定できる。長さ 7.7cm、幅 5.7cm、厚さ 4.1cm を測る。重量 242g。

砥石 60 側面を打ち割った不整な形状の砂岩石材を利用する。対向する上下面を砥面とし、凹面が形成されている。石皿ともみえるが、凹面の曲率が大きく砥石とする。側面には粗い切削面が残る。現状で長さ 11.4cm、幅 7.6cm、厚さ 6.1cm を測る。重量 634g。

石器類を図 17 に示す。

石核 59 石材分割したような单剥離面が残る。片方の側面に小剥離痕が連続する。石材は黒曜石角礫で、高さ 2.9cm、幅 1.9cm、長さ 1.7cm、重量 8.0g を測る。

段落ち 21 (図 6・19 ~ 22)

溝 22 に沿った、調査区北東隅に位置する。区画整理前の旧状地形で有田・小田部台地北辺部の崖線を示していた段落ちではないかと想像する地形である。段下部は水田としての利用があったものと考えられる(図 6・3 層)。この位置から遺物が少量出土した。肥前系陶器が含まれる他は大半が土師器細片資料である。また、石器・石製品、鉄滓が

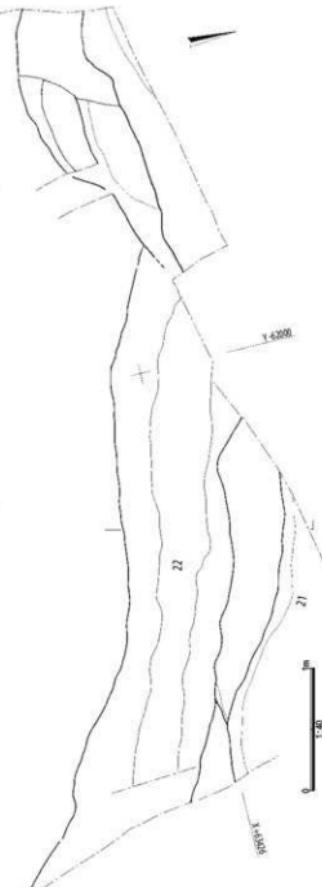


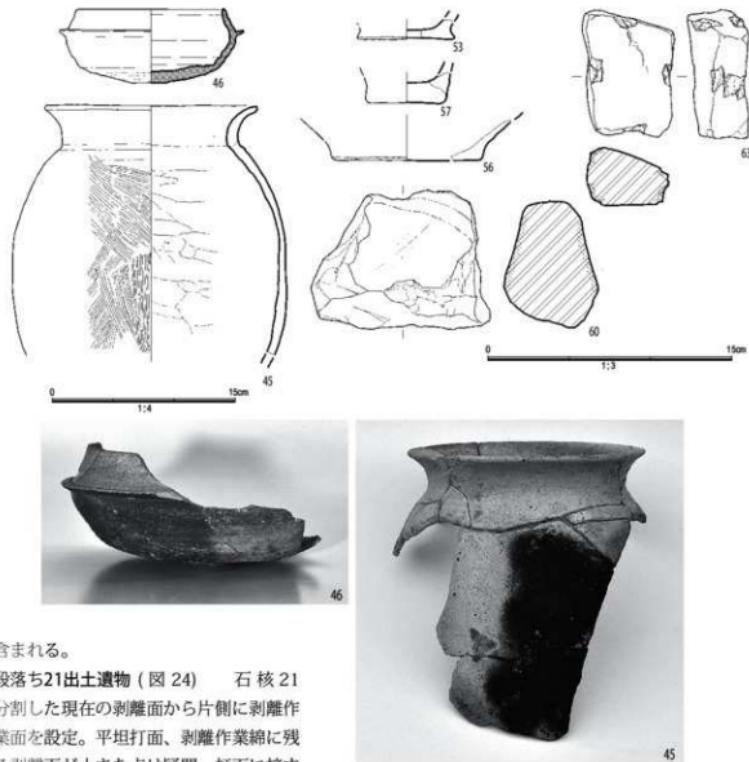
図 20 溝22 (1 : 40)



図21 段落ち21・溝22（東から）



図22 段落ち21・溝22（西から）



含まれる。

#### 段落ち21出土遺物（図24） 石核21

分割した現在の剥離面から片側に剥離作業面を設定。平坦打面、剥離作業綿に残る剥離面が小さな点は疑問。打面に接する縁部が、剥離痕重複して鈍角となって

いるのは調整か。石材は黒曜石円礫。高さ2.1cm、幅3.0cm、長さ2.1cm、重量28gを測る。

砥石55 偏平な粘板岩を素材とし、片面を砥面に利用している。長さ10.3cm、幅8.2cm、厚さ1.1cm、重さ107gを測る。

以上の他に図示しないが肥前系陶器破片が出土している。内外面に施釉する碗で、内底面を輪状に欠き取り、透明釉が薄くかかるもの、碗で、釉が褐色味を帯びるものがある。

#### 土壌13（図5）

比較的形状の整ったものを土壌とした。覆土は黒褐色(7.5YR 3/2)、砂混じりの粘土で、隣接する不整な落ち込み16と共に通する。梢円形状を呈し、長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。遺物の出土はなかった。

#### 不整な落ち込み16（図5）

調査区外へ広がるうちの一部と思われる。不整な円形状で隣接する落ち込みに重なっている。幅1.5m、深さ0.3~0.4mで調査区内のそれとは平面規模・深さと異なって大である。底面は弧状となり

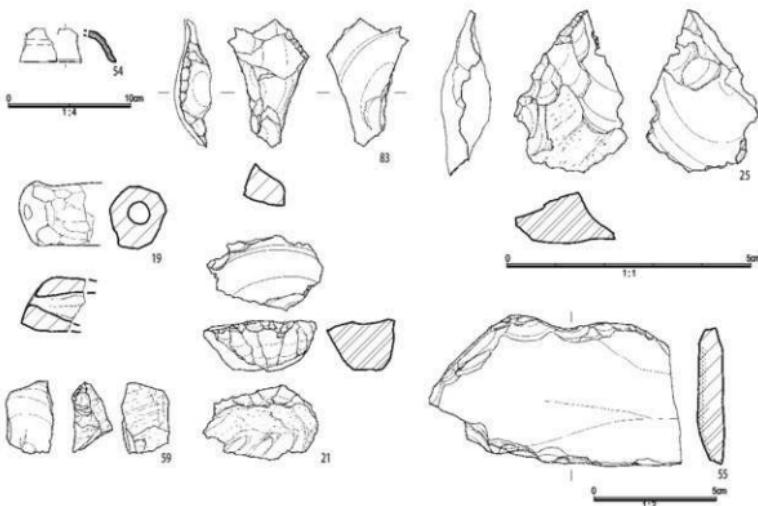


図24 遺構出土遺物 実測図(1:1・1:2・1:4)

流水の影響かと思われるが、砂層の堆積ではなく、土壤 13 と同様黒褐色粘質土が堆積し、水から離れた環境で埋積したものとみえる。遺物は覆土中から少量の土器極細片が出土した。いずれも転磨が著しく弥生土器若しくは土師器かとみえるが、詳細不明。調査区から北側に広がるものとみえ、台地北側に想定される台地縁辺部の崖線との関係を考える。

#### その他の遺構出土遺物（図24）

須恵器蓋 54 小穴 18 出土。口縁部細片資料である。やや開く器形の内外面とも周回方向の撫で調整、口唇部内側に緩い段が残り、外面中位に凹線が巡る。胎土は緻密で均質、稀に粗砂を含む。器表灰白色を呈す。

土錐 19 樹根跡状の不正な落ち込み出土。端部の資料である。粘土板を軸に巻き付け、手捏ね整形したものとみえる。断面楕円形、孔は円錐状となる。胎土はやや粒状性があり、器表明赤褐色 (2.5YR 5/8) を呈す。径 2.7cm を測る。

石器 83 穴住居 1 出土。半透明の黒曜石横長剥片を素材とする。横長剥片の打面側の縁辺に急斜な剥離痕が連続し、対抗する縁部の一部に小剥離痕が連続するが、大部分は剥片剥離後の割れにより欠失する。図示する位置では台形石器とみえるが、欠失部の形状が不明で、不確実な資料である。長さ 2.5cm、幅 1.5cm、厚さ 0.8cm、重量 2.0g。

石器 25 不整な落ち込み 14 出土。黒曜石剥片を素材とする。素材縁部に深く入る特徴的な剥離痕が連続する。長さ 3.3cm、幅 2.3cm、厚さ 1.0cm、重量 5.3g を測る。

石核 21 小穴 10 出土。黒曜石円礫を原材とする。分割した現在の剥離面から片側に剥離作業面を設定した平坦打面の石核とするが、剥離作業面に残る剥離面が小さな点は疑問。打面に接する縁部に剥離痕が重複して鈍角となっているのは調整か。高さ 2.1cm、幅 3.0cm、長さ 1.8cm、重さ 2.8g を測る。

### 3まとめ

有田遺跡群第245次調査地点は、有田・小田部台地のうち、開析され、複雑に分岐した台地の北辺部に位置する。図25で、原地形を記録した地形図上に第245次地点、及び近隣調査地点を重ねて示す。図上で、本調査地点が、台地のまさに縁辺というべき位置にあることを見て取ることができる。

段落ち21、溝22は図25の示す地形に沿っており、溝22を出土須恵器、土師器から古墳時代後期のものとすると、開田、工作に伴い多少の出入りはあるとしても、大方はこの時期から台地崖線の示す景観を保ってきたようである。

第245次地点では、竪穴住居が単独で存在するほかに台地上に同時期の遺構を確認することができなかった。台地縁辺に沿う溝は、遺物から同時期と考えられ、竪穴住居が営まれた時期、台地縁辺に沿った地点に全面に溝が走る低い台地上に竪穴住居が単独で、あるいは極まばらに分布するような景観となっていたものかと想像される。

また、ここでいう竪穴住居は一般的な平面形ではなく、竈を造り付ける側が長辺となる長方形状となり、内部に柱穴を確認できない、特異な形状を示すものである。

調査区内に分布する小穴様の落ち込みの大半は、人為的なものではないと判断した。南に接する第22次地点でも、多数の小穴が分布し、掘立柱建物を復原されているが、第245次地点と同様の性状であったとすれば、建物とする多くが、柱穴の配置、深さが不整であることも加えて、すでに第22次調査の報告者が記述するように、建物としては成立しないものと考えられる。

調査で出土した遺物は少量であるが、溝22からの出土遺物に各時期の弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器が含まれている。全体の地形から、この溝は谷奥から前面沖積低地方向へ流れたと考えられること、また、谷に沿って奥側の第38次地点でも遺物の出土があったことから、南方にこの時代の遺構・遺物が分布していたことが予想できる。80m南に位置する第152次ほか調査地点では、該期の遺構が確認されており、それに連なる分布が広がっていたものか。

#### 図25について

本図は、「有田・小田部 第6集」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集)所載の有田遺跡群調査区位置図に依り、調査地点位置図と基盤の地形図を重ねたものである。

基盤となる地形図は、旧陸軍測量部が作成した詳細図であり、原本の縮尺3,000分の1と思われる。昭和16年9月付西部軍管区の検印があり、「不許複製」、「極秘」等の印も見える。また、博多港付近は白抜きされている。

今回使用するものの原図には、青焼き図・第2原図があるが、見た目では、前者が原本のような印象を受ける。都市計画担当部署で使用したものか、図上に現在の路線を書き加えたものがある。本書に使用したものは、複数回の複写を経たものであり、図郭の歪みが見て分かる。今回、それを画像上で操作し、基図に当てはめたものである。また、原本の精度、図法も不明である。

したがって、精度を求める図としては不適で、縮尺を示してはいるが、実際はおよその位置関係を示すものである。

なお、図中の網点は調査区を、ハッチングは、北に広がる沖積低地・谷の範囲を示す。



図25 有田245次調査地点位置図 (1:5,000)